事例研究報告

特別支援学校高等部の生徒に困っている場面でカードや言葉を使って対応することを教える

生徒の実態

高等部男子　知的障がい

＜TTAP直接観察尺度において見えてきた課題＞

（TEACCH Transition Assessment Profile）

・必要な時に援助を求める　・現在の状態に関する質問に答える

・必要なコミュニケーションスキル　・自発的コミュニケーション

・自己抑制ができる

＜コミュニケーションの実態＞

- 言語指示は日常的な内容であれば，理解できることもあるが，正しく理解できていないことの方が多い。
- 文字（ひらがな中心）で書くと，言語指示よりは理解できているが，慣れない指示であれば，難しい。
- 友だちの様子等を見て，指示を理解していることが多い。
- 「ダメです」「バツです」など否定的な対応に対しては，おでこを机にぶつける，鉛筆の芯を折る，声をだして泣く等の様子が見られる。

教員の考え

「訂正やわからない指示があったときに，不適切な行動が多いので，困っていることをうまく伝えて解決するスキルを身につけてほしい。」

アドバイザーからの助言

- 今回の学習場面では，課題の間違いがあったときや注意があったときに，すぐに不適切な行動に出たのではなく，それまでに「残念！」といって我慢できていました。
その後，さらに訂正や注意をされることが続いても「プリキュア…」「熱が…37.6度…」などと言いながらよく我慢していました。
その後の教員の訂正が入ったときに鉛筆を折ることで，失敗経験を解消しようとしていました。
- できるだけ不適切な行動に至るまでに（不安定になる様子が見られたときに）「よく我慢して課題したね～」「がんばってるね」「できたね」ということで，不適切な行動にまでは至らずに済むので，できるだけ不適切な行動は出さないように支援しましょう。

アドバイザーからの助言

- とはいえ，指示とは違うことをしていたり，
  間違えていたりする場合は修正を求められるだろうし，
  配慮してもらえない場合もあることを考えて，
  本人につけてほしい力として，
  その場で相手に支援をしてもらえるように
  「手伝ってください」「どうしたらいいですか？」等が言えるように
  練習をしていきましょう。
- 「手伝ってください」は，日常的に自発して言えるが，
  不適切な行動が出るくらい不安定になる場面では
  自発できていません。
  個別で対応できる時間に，そのような場面を
  設定して，自発できるよう指導していきましょう。

アドバイザーからの助言

- 使用する言葉については，記録を見てもオールマイティに通用する言葉は見当たりませんから，どの言葉がいいかは要検討です。すべての場面を網羅する言葉というよりは，その場その場に応じた言葉を一つずつ練習していきましょう。
- 不安定になる場面は，決まった場面ではなく，いつ起こるかわかりません。PECSのブックは，いつ起きてもブックが言葉を自発できるための支援ツールとして活用できるよう，常に持ち歩くように指導しましょう。（ブックの携帯を本人の判断任せにするのは難しいことです）。

指導目標の見直し

【長期目標】

嫌なことがあった場面や困っている場でカードや言葉を使って対応することができる。

【指導目標】

自立活動の時間に困っている場面を設定し，カードで学習した言葉を用いて対応することができる。

指導1：援助要求を教える

＜指導１＞（１０月３１日～）

① 自立活動（個別指導）の時間において，援助要求（「手伝ってください」「どうしたらいいですか？」「助けてください」など）を使う練習をPECSのカードを用いて行う。練習をしながら，本人が使いやすい言葉を選んでいく。

② 課題学習中，訂正がある場面で不安定になる様子が見られたら，PECSのブックを提示したり指さししたりして，援助要求を言葉かカードでするよう促す。
適切な言葉（カード）で伝えられたら，
「鉛筆を折ったりしないで，伝えられて偉いね～」と賞賛し，
要求された援助を行う。ブックの提示等の支援は，
自発してできるようになったらフェイドアウトする。

指導1：援助要求を教える

③　自立活動以外の場面で，
訂正や注意をされて不安定な様子が見られたら，
PECSのブックを指さす等の支援を行って，
その場で援助要求が言葉かカードで出るよう
働きかける。
適切な言葉（カード）で伝えられたら，
賞賛し援助を行う。

記録方法と記録

＜自立活動の場面＞

対面学習で訂正等を行ったときに、（対象生徒が）どのように対応したかを記録する。

（音声言語、PECSの使用、機能的でない台詞、不適切な行動）

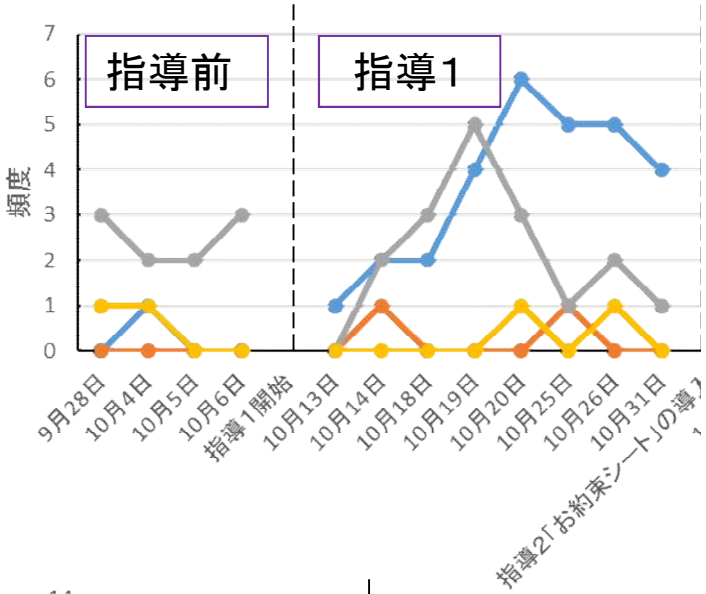
＜般化場面＞

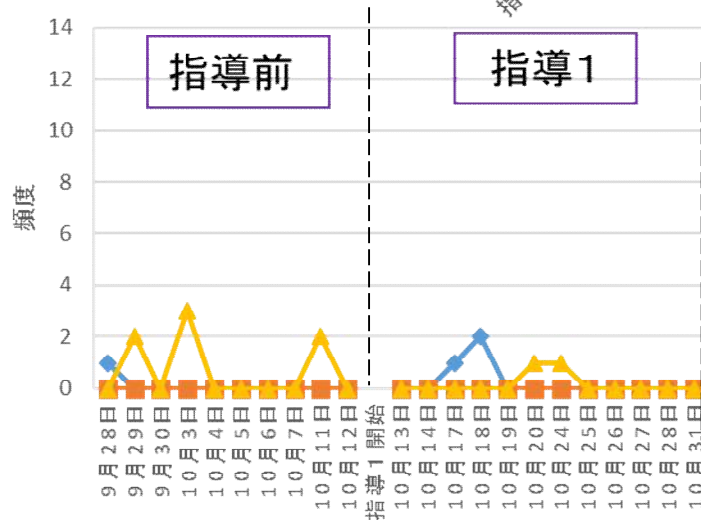
嫌なことや困ったこと等があった場面で、（対象生徒が）どのように対応したかを記録する。

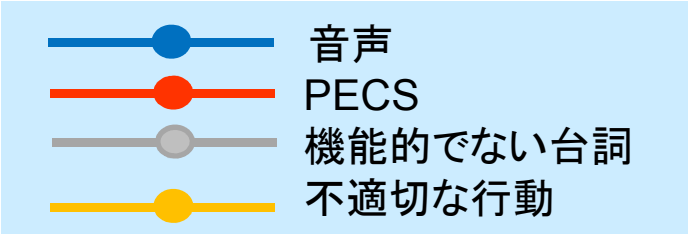
（音声言語、PECSの使用、不適切な行動）

＊１エピソードにつき、複数回自傷等をしても1カウントとする。

指導1の成果







- 自立活動の時間にPECSを用いたコミュニケーション指導を行ったことで、自立活動の時間には、音声言語で答えることが増えていき、「プリキュア～」といった機能的ではない台詞は減っていった。

指導2：お約束シート

＜指導2＞（11月1日～）

① 「お約束シート」（鉛筆を折ったり頭をぶつけたりせずに言葉で言うことを視覚的に提示したシート）を用意し，PECSのブックを併用しながら，約束の確認をする。

② 不適切な行動が出た場面や出そうな場面で「お約束シート」を見せたり，PECSのブックを提示したりして，言葉で表現するよう働きかける。

③ 言葉で対応できた時には，「難しいなあ」と共感したり拒否の要求に応じたりする。

④ 不適切な行動を継続している場合は，反応しない。

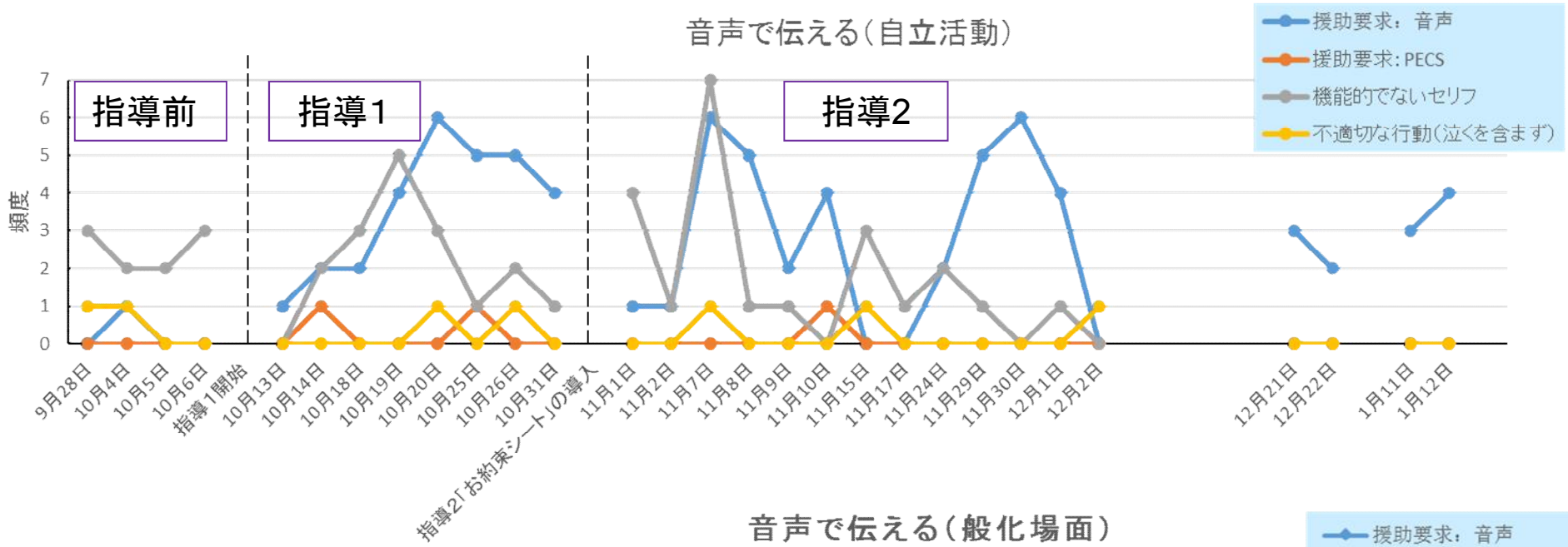
お約束シート

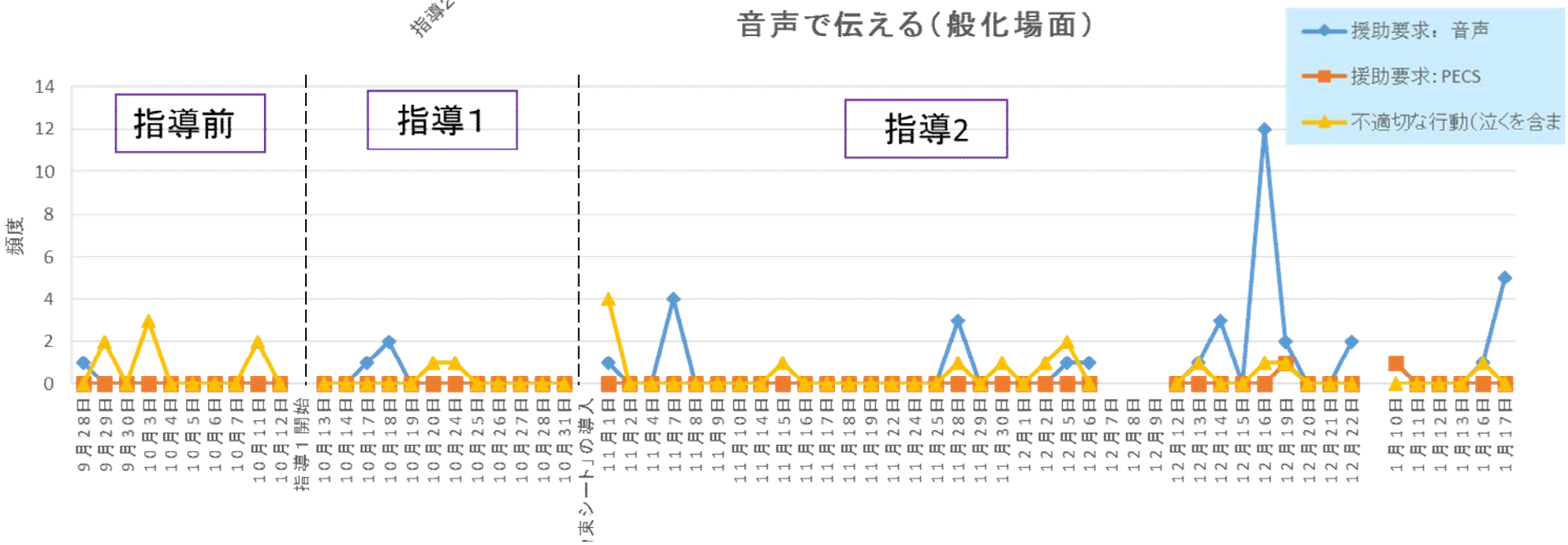
むずかしいなぁ
こまったなぁ
イヤだなぁ

いいね♡
てつだってください
むずかしいです
わかりません
イヤです
休憩(きゅうけい)しても
いいですか

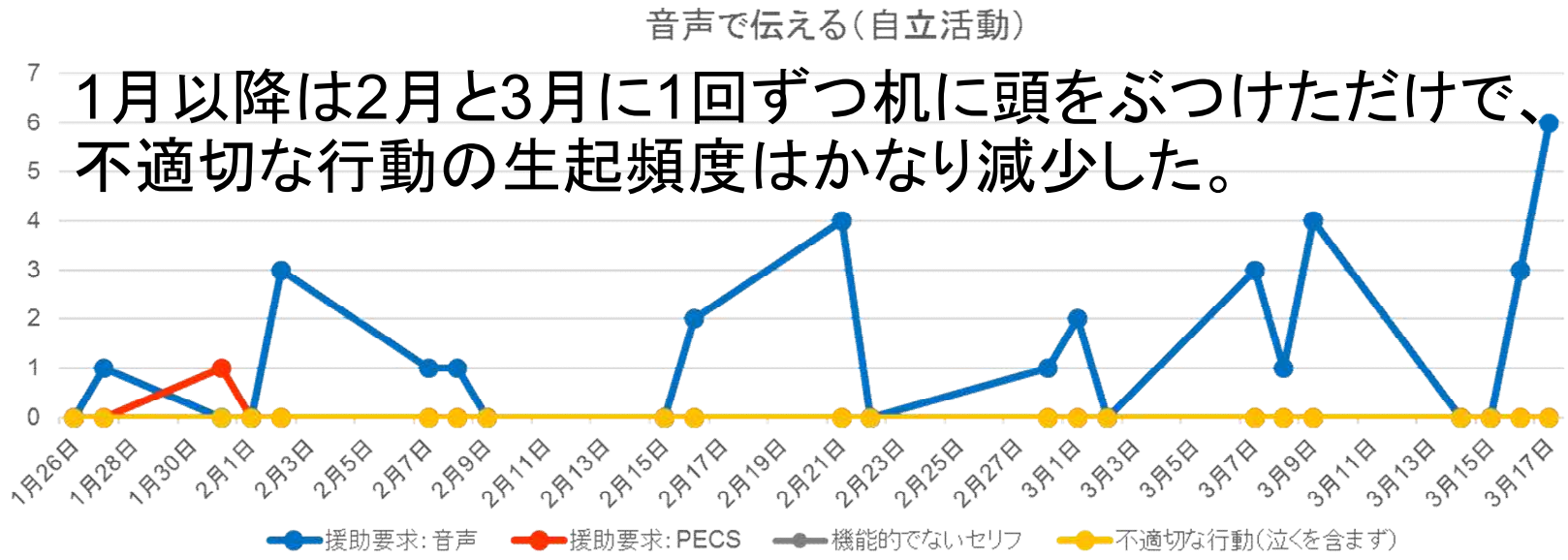
ダメだよ
あたまをぶつける
えんぴつをおる
ボキッ
ふくをやぶる

指導2の成果

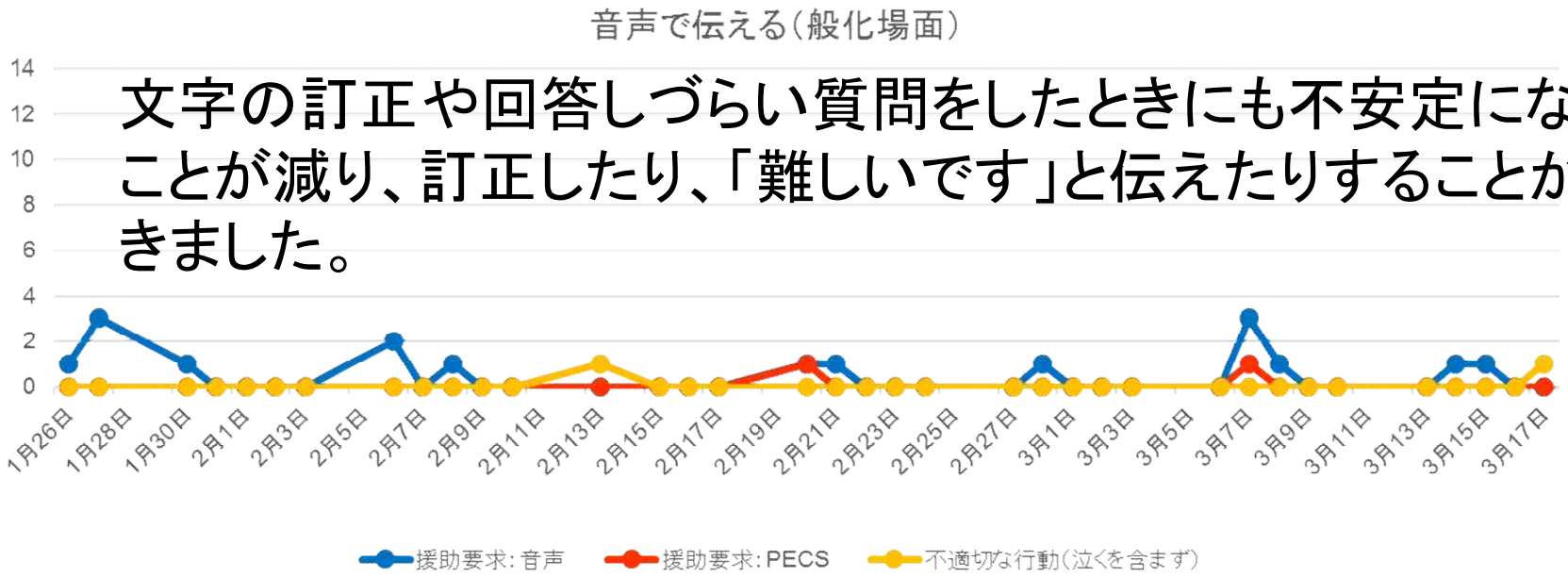

音声で伝える（自立活動）
援助要求：音声
援助要求：PECS
機能的でないセリフ
不適切な行動（泣くを含まず）
指導前
指導1
指導2
頻度
指導1開始
指導2「お約束シート」の導入


音声で伝える（般化場面）
援助要求：音声
援助要求：PECS
不適切な行動（泣くを含ま
指導前
指導1
指導2
頻度
指導1開始

指導2の成果



1月以降は2月と3月に1回ずつ机に頭をぶつけただけで、不適切な行動の生起頻度はかなり減少した。



文字の訂正や回答しづらい質問をしたときにも不安定になることが減り、訂正したり、「難しいです」と伝えたりすることができました。

ここが成功のポイント

○　PECSを用いて，コミュニケーションの学習をすることで、言葉で対応できることが増えた。

○　対象生徒が生活している支援センターの職員からは，語彙数が増えたとの報告があり、服を破る行動や自傷が今年度は一度もなかった等報告があった。